



Title	日本語漢字語彙習得の考察への一提案：中国語母語話者を対象に
Author(s)	郭, 毓芳
Citation	大阪大学言語文化学. 2009, 18, p. 221-230
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77836
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語漢字語彙習得の考察への一提案

—中国語母語話者を対象に—*

郭 毓芳**

キーワード：日本語漢字語彙、中国語母語話者、習得

本稿は提供中文母語話者在自然條件下習得漢字詞彙的考察方法。

以往的先行研究所考察出的關於中文母語話者的漢字詞彙習得情況，是通過「文法性判斷測驗」來檢視，那是在強制性且不自然的條件設定下所進行的調查。在那種情況下所檢視出來的結果，存在著無法完全掌握中文母語話者習得實態的問題點。正因如此，本稿的目的為解明先行研究的問題點並提供新的研究方法來考察中文母語話者的漢字詞彙習得情況。

方法為下述之步驟。首先，漢字詞彙的分類及選定是以文化廳（1978）為基準，將漢字詞彙分為「日中同型同義詞（Sグループ）」、「日中同型類義詞（Oグループ）」、「日中同型異義詞（Dグループ）」、「僅存在於日語中的漢字詞彙（Nグループ）」四種類型。其次是，調查者提示分別隸屬四類型的漢字詞彙給調查對象，讓調查對象透過自由聯想的方法以口頭來造句。最後一個步驟為實施半構造化面談法的內省報告。

本稿擷取已收集的調查資料的一部分，採樣兩名調查對象的調查結果來進行說明。

根據現階段的觀察結果，在四類型的漢字詞彙的使用裡，學習者一方面習得日語漢字詞彙的意思與用法，一方面利用母語的中文詞彙的知識來進行漢字詞彙的使用。此外，比起藉由中文的推測與使用而習得的日語漢語詞彙的知識，未透過中文知識所習得的日語漢字詞彙在使用上較為正確。

今後將利用此研究方法來收集並分析更多的資料，藉此來考察中文母語話者之日文漢字詞彙習得實態，且將全面性地解明其過程中的現象作為目標。

* 日語漢字語彙習得考察之一提案 —以中文母語話者為對象—（郭毓芳 KUO Yufang）

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1 はじめに

中国語を母語¹⁾とする学習者(以下、学習者とする)における日本語漢字語彙の習得において、中国語は習得に大きく影響を与えていると指摘されており(安 1999、加藤 2005)、その習得状況の要となっていることが検証されてきた。それらの結果は「文法性判断テスト²⁾」という調査方法を通じて検証した結果であり、強制的かつ不自然な条件設定の下で出された内容である。しかし、果たして、そのような条件設定の下で検証された結果は、学習者の習得実態を把握しきれるだろうか。自然状況³⁾下での学習者における日本語漢字語彙の習得はどういったものだろうかという疑問が本稿の出発点である。

本稿では、学習者における日本語漢字語彙習得の先行研究の研究方法の問題点を明らかにし、それに代わる研究方法を提案することを目的とする。そして、新たな方法で収集したデータの一部を取り上げ、学習者の習得状況を検討する。

2 先行研究及びその問題点

2. 1 中国語母語話者における漢字語彙の習得について

文化庁(1978)によると、中国語を母語とする者が日本語を学習する場合、次の2点において有利とされる。1) 中国語を母語とする多くの学習者は、母語習得の段階からすでに漢字に慣れ親しみ、日本語を学習する段階に至っては、それを文字として識別する訓練が完成している。2) それぞれの漢字が意味を持っているため、漢字仮名交じりの日本語文を見てその大まかな意味を理解することは可能である。

しかし、実際問題として、同じ漢字で書かれていても、日本語としての意味と中国語としての意味が常に対応するとは限らない。中には意味が若干異なるものや全く異なる意味のものも少なくない。また、日本語としての漢字語彙の中には、中国語として同じ形が存在しないものもある。

そこで、文化庁(1978)では、中国語を母語とする日本語学習者の日本語の学習と教育に資することを目的として、初級から中級程度の日本語の漢字語彙を中国語のものと対比して、意味の異同に基づいて4つのカテゴリーに分類し、それぞれの漢字語彙を提示している。同書は、教育的な観点から相当数の日中の漢字語彙を整理した初めての研究であると言ってよい。

¹⁾ 本論における「母語」の定義は、黄(1993: 436)の「物事を考える際に使用する言語」(筆者訳)を援用する。

²⁾ 文法性判断テストについては、2.2 節で詳述する。

³⁾ 「自然状況」とは、仮説を検証することが目的で設けられた実験の環境に反して、学習者は制限なく、自由に有する漢字語彙の知識を観察することができる状況を指す。

2. 2 漢字語彙習得の研究

安(1999)は韓国人学習者・中国人学習者を対象に、学習者の母語と日本語との対応関係が、漢字語彙の意味の習得にどう影響するかを分析した。その結果、韓国人学習者には母語を用いることで生じる誤用及び間違っただ推測から導かれる誤用が観察され、中国語学習者は中国語に存在する漢字語彙の使用を回避し、誤った推測を行うことが確認された。

加藤(2005)は中国語母語話者の日本語漢字語彙習得について分析している。また、その結果を英語母語話者の日本語漢字語彙習得過程と比較して、その間に見られる違いについて述べている。検証の結果として、中国語母語話者は日本語漢字語彙の習得過程において母語転移を受けていると説明している。

こうした従来の研究は仮説検証型である安(1999)、加藤(2005)などの先行研究で使われていた文法性判断テストは学習者の誤用訂正を観察するものであり、学習者は事前に与えられた文脈に沿って判断することになる。この方法は比較的容易に実施でき、使用頻度が高くない文に目標語彙を用いて、その文に対する判断を考察することができる。しかし、学習者が自分の言語直感ではなく、こうあるべきという思い込みに依存して答えてしまう危険性がある。つまり、研究者が予測した習得に影響を与える要因が問題項目として用意されているため、学習者における漢字語彙の習得状況は不自然かつ強制的環境で検証される。また、漢字語彙習得では、学習者は漢字語彙の知識を利用するとして説明されてきたが、利用の仕方が同じであるかどうか解明されておらず、また、効果もどのようなものであるかも明らかにされていない。

3 研究方法

3. 1 漢字語彙習得を捉える新しい研究方法

さまざまな漢字語彙について学習者の自然な習得状況を横断的あるいは縦断的に研究するためには、学習者が自然に産出した膨大な言語コーパスが必要となろう。しかし、このような研究は膨大な時間と多くの調査対象者の協力を必要とする。

そこで、実施可能な方法としては、漢字語彙を選定し、それについてできるだけ自然状況で生成された言語使用に近いデータを学習者から引き出すことが考えられる。つまり、学習者が所有している漢字語彙の知識が開示できる方法を取り入れ、学習者による漢字語彙の使用、使用に至る思考のプロセス、意識にのぼったことを学習者自身に口頭で報告するという研究プロセスが効果的であると思われる。よって、本稿では、用例作成課題と内省報告という調査方法を用いて、漢字語彙の使用から、学習者の習得のメカニズムを考察する。

3. 2 語彙の選定

文化庁は、日本語と中国語の漢字語彙の特徴、すなわち、字形が同じであっても意味のずれが生じる場合を考慮し、漢字語彙を4種類に分類している。その分類⁴⁾は以下のとおりである。

- ①日中両言語における意味が同じか、または、きわめて近いものが「S (Same)」に分類される。
- ②日中両言語における意味が一部重なってはいるが、両者の間にずれのあるものが「O (Overlap)」に分類される。
- ③日中両言語における意味が著しく異なるものは「D (Different)」に分類される。
- ④日本語の漢字語彙と同じ漢字語彙が中国語に存在しないものが「(Nothing)」に分類される。

本稿では、上述の文化庁の分類（以下、SODN グループとする）に基づいて研究対象語を選定し、学習者による、SODN グループそれぞれの日本語漢字語彙の使用に見られる特徴を検討する。そうすることで、両言語の漢字語彙の共通点と相違点に留意しつつ、習得の際に知識がどのように利用されているかを観察することが可能となり、知識の利用の仕方の特徴が浮かび上がってくることが予想される。

3. 3 調査

3. 3. 1 用例作成課題

調査の第一段階では、現在学習者が持っている語彙知識を表わすことのできる方法として、学習者が事前に文脈を与えられるといった制限及び時間の制限を設けない自由連想⁵⁾という調査方法を通して考察する。

まず、調査対象者⁶⁾に日本語漢字語彙を示し、時間と文の数を制限せずに自由に口頭で日本語の文を作成してもらった⁷⁾。

例えば、調査対象者にターゲット語彙（例：貧乏）を示し、調査対象者にその語彙（貧乏）を使って、自由に文を作成するよう指示した。調査対象者が作成した文を以下に挙げる。

⁴⁾ 文化庁（1978）を基に筆者が作成した。

⁵⁾ 梅本（1969）では、連想の実験的研究は1879年にFrancis Galtonによって始められたものであるが、この実験は18世紀のD.Hartley以来の思弁的な連合心理学を初めて実験にうつしたものであり、連合心理学の背景から切り離して考えることはできないと述べられている。

⁶⁾ 本稿は日本で留学している台湾人学習者を調査対象者として設定する。

⁷⁾ 本論は梅本（1969）で説明された自由連想の手順とは若干異なる。自由連想は調査対象者に刺激語を与え、刺激語に関連した語彙を連想させる手順をとる。本論は調査対象者がどのように刺激語をいかに利用して、用例を作るのか、つまり、刺激語の使用を考察するものであり、この主旨に応じて調査の手順を修正した。

(例) 貧乏な生活といっても楽しく過ごせばいいです。

連想の間、調査者と調査対象者はすべて日本語で会話を行った。日本語で会話したのは調査対象者が文を考えている途中、思考のプロセスに支障を与えないようにするためである。

3. 3. 2 内省報告

調査の第二段階では、内省報告としてフォローアップインタビューを実施した。インタビューは半構造化インタビュー形式⁸⁾を採用した。この方法により、自由連想の回答に至る思考のプロセスを知ることができ、どのような場合に適切な用例を作れるのか、どのような場合に適切な用例を作ることができないのかを探ることが可能になる。また、フォローアップインタビューでの会話は基本的に中国語で行った。中国語でインタビューを行った理由は、調査対象者に自分がどのように考えたのかをより正確に述べてもらうためである。

内省報告の実施方法は、例えば、3. 3. 1で挙げられた例、「貧乏な生活といっても楽しく過ごせばいいです」について、どのように「貧乏」を使って文を作ったのかを質問した。答えとしては、調査対象者は、例の「貧乏」というターゲット語は「日本語の『貧乏』、つまり、『お金がない』という意味として考えて使った」と答えた。

自由連想で作成された用例は学習者が持っている語彙知識を外部に表現する証拠である。それらの証拠は内省報告を通じ、学習者はターゲット語の意味をどのように考え、どのように使っているのかをより具体的に理解することができる。

3. 3. 3 データ

これまで筆者は、8名の中国語母語話者を対象に、4回から5回の調査を行った。本稿では、そのうちの2名から得たデータに焦点を絞り、分析・考察を行う。

また、用例作成課題で得たデータについては、各文の文法性を一定の方法で確定した。調査データが適切かどうかについては、3人の日本語ネイティブスピーカーに確認を依頼した。確認の基準としては、a. 漢字語彙の意味が適切か。b. 漢字語彙の共起関係が正確かの2点を設けた。

まず、「a. 漢字語彙の意味が適切かどうか」に関しては、3人のネイティブスピーカーに、「適切に使用されている」なら、○を、「適切に使用されていないが、意味

⁸⁾ 厳密に言えば質問のための標準リストは使用しないで進められる「非構造化インタビュー」の技術を使用しながら、予め面接でふれる必要のある質問について指針が用意されている場合や面接対象者の回答によって面接者の質問する事項がリストされているような場合である (フリック 2002)。

が理解できる」なら、△を、「適切に使用されず、意味の理解が不可能」なら、×をつけるよう依頼した。また、「b. 漢字語彙の共起関係が正確かどうか」に関しては、「正確な共起関係」なら、○を、「正確でない共起関係」なら、×をつけるよう依頼した。

本稿における適切な用例 / 不適切な用例と判定する基準として、「a. 漢字語彙の意味が適切に使用されているかどうか」については、3人とも○、また2人が○、1人が△とつけた場合はそれを適切とみなし、それ以外は、不適切とみなす。「b. 漢字語彙の共起関係が正確かどうか」は、3人とも○をつけない限り、正確な共起関係ができていると認めない。不適切な用例の箇所には「*」をつけ、適切な用例と区別した。「*」は、語彙に関する誤用のみに関して付けられるものである。用例中に見られる他の文法（純粹に形態的な知識）等による誤用については本稿では取り上げない⁹⁾。

4 データの分析例

本節では調査結果の一部を取り上げ、学習者における日本語漢字語彙の使用を SODN グループごとに観察する。

4. 1 S グループ「意義」¹⁰⁾

S グループの例として、「意義¹¹⁾」で作成された用例を取り上げる。調査対象者¹²⁾ R¹³⁾ と H¹⁴⁾ による用例作成の一部を (1) ~ (4) に示す。〈 〉内はその用例の作成者を示す。

- (1) 政府の存在の意義は国民の利益を守ることです。〈 R 〉
- (2) この辞書に載った * 説明の意義は完全に分かりません。〈 R 〉
- (3) 生きている意義は何ですか。〈 H 〉
- (4) 子どもにテレビを見せないのはどんな * 教育意義がありますか。〈 H 〉

⁹⁾ 例を挙げると、「意識的な活動」を誤って「意識的的活動」に作成された助詞の誤用は分析対象としない。

¹⁰⁾ 本論で取り上げられた漢字語彙の意味の出典は以下の通りである。日本語の辞書：『広辞苑 第六版』と『岩波国語辞典 第五版』。中国語の辞書：『重編國語辭典修訂本』。

¹¹⁾ 日本語の「意義」は「a. その言葉によってあらわされる内容。特に「意味」と区別して「一つの語から文脈を離れてもさし得る内容」の意に使うこともある。b. 物事が他との連関において持つ価値・重要性。」との意味がある。中国語の「意義」は「a. 意旨（日本語では意図・意味にあたる）b. 理趣（日本語では価値にあたる）」との意味がある。

¹²⁾ 調査対象者の名前はイニシャルで表記する。

¹³⁾ R は現在日本の専門学校で勉強している。日本語学習歴は6年である。平成19年度日本語能力試験の1級取得。

¹⁴⁾ H は2007年9月から2008年8月まで短期留学生として日本で留学した。日本語学習歴は7年である。平成19年度（2007年12月）の日本語能力試験の1級試験を受けたが、合格できなかった。Hの日本語能力を測るために、2008年4月末に平成13年度の問題集を解いてもらったところ、1級合格水準に達していた。

(1) と (3) は適切になっている一方、(2)、(4) は適切にならなかった。日中両言語の「意義」という漢字語彙には、いずれも「価値」と「意味」という意味が含まれているが、微妙な意味の違いがある。

R と H に対する内省報告から、日中両言語の「意義」の意味と用法は同じであるとの回答が得られた。用例の中にある漢字語彙はどのような意味として認識されるのかと質問したところ、R は (1) の「政府の存在の『意義』と政府の存在の『価値』は同じです」と語った。H は (3) の「生きている『意義』と生きている『価値』は同じです」と答えた。また、R は (2) の「この辞書に載った説明の『意義』とこの辞書に載った説明の『意味』は同じです」と考えていることが内省報告で分かった。ところが、(2) は「意味」として使用されているにも関わらず、その用法は日本語として正確ではないため、適切にならなかったが、(2) の使用は中国語では成立する。R は日中両言語の「意義」の意味と用法が対応していると考えて (2) を作成したとみられる。

(4) の「教育意義」は、「教育的意義」としたほうが正確な日本語になる。その一方で、中国語では「教育」と「意義」という二つの漢字語彙が共起して「教育意義」と表現することができ、日本語の「教育的意義」と対応している。ここでは、H が日中両言語における語彙の共起性の差異に認識せず、中国語の漢字語彙間の共起表現が日本語に持ち込まれた結果、誤用が生じたと考えられる。

「意義」の使用においては、中国語語彙の意味と用法 (例 (2))、また、中国語語彙の共起関係 (例 (4)) が利用されており、その利用は、マイナスの影響も与えている。今回は用例 (1) と (3) のような用例は中国語によるプラスの影響を受けているかについて検討できなかったが、再度追跡インタビューを実施して明らかにする必要がある。

4. 2 O グループ「模様¹⁵⁾」

O グループの例として、「模様」で作成された用例を取り上げる。R と H による用例作成の一部は以下の通りである。

- (5) 私は水玉模様と星模様のものが大好きです。＜ R ＞
- (6) 彼は嘘ばかりですので、いつも *知らない模様をして、信じないほうがいいと思います。＜ R ＞
- (7) どんな模様の浴衣が好き。＜ H ＞
- (8) 中学校の *クラスメートの模様は全部忘れました。＜ H ＞

¹⁵⁾ 日本語の「模様」の意味は「a. 織物・染物・彫刻などの装飾に施す種々のかたち。紋様。色道大鏡。b. ありさま。様子。c. 計画。趣向。d. てほん。模範」である。中国語の意味は「a. 形状、式様（日本語の形、様式にあたる）b. 容貌（日本語の容貌、見た目に当たる）c. 概略（日本語の概略にあたる）」である。

(5) と (7) は「模様」の意味及び用法が正確に把握され、適切な用例とみなされる。一方、「人物」の「見た目」、「姿」を表すことができると判断した結果、R は (6) の「知らない『模様』は知らない『ふり』の意味として使う」と答えた。H は (8) の「中学校のクラスメートの『模様』は中学校のクラスメートの『姿』、『見た目』と同じ意味を持つ」と内省報告で回答した。中国語の「模様」は「人物」の「見た目」、「姿」を表すことができるが、「人物」を描写する場合は、日本語では通常「模様」を使わずに「様子」などを使う。2 人とも日中両言語「模様」の意味範疇が異なるという特徴を知らず、中国語の「模様」の意味から日本語の「模様」の意味を推測して、適切ではない用例を作ったことが分かる。

現段階の観察から分かるように、日本語漢字語彙「模様」の知識が着実に形成されている (例 (5)、(7)) が、依然として中国語の「模様」の意味を転用しており、日本語の「模様」が持つ意味の一部として認識された結果、誤用が生じたことが分かった (例 (6)、(8))。

4. 3 D グループ「貧乏¹⁶⁾」

ここでは、D グループの例として、「貧乏」に関する用例を挙げたい。

(9) 貧乏な生活といっても、楽しく過ごせばいいです。＜R＞

(10) 日本は*自然資源が貧乏な国です。＜R＞

(11) 私はあまりお金がない貧乏人です。＜H＞

(12) 貧乏だけど、毎日楽しく過ごしたらいい。＜H＞

(13) あまり本を読まない人は*知識が貧乏になるよ。＜H＞

R と H の内省報告によると、「貧乏」は「お金がない」、「貧しい」、「乏しい」、「少ない」の意味があると回答している。(9)、(11)、(12) は適切な用例として成り立つ。この三つの用例では、日本語での「貧乏」が「お金がない」、「貧しい」という意味で使用された。一方、内省報告では、R は (10) の「日本は自然資源が『貧乏』な国の『貧乏』は、日本語の『乏しい』『少ない』の意味と同じ」と言った。また、H も (13) の「あまり本を読まない人は知識が『貧乏』になるという箇所における『貧乏』は、『乏しい』『少ない』の意味として使う」と答えた。ここの「乏しい」、「少ない」の意味は日本語の「貧乏」には含まれていない。その一方、中国語語彙の「貧乏」は「乏しい」「少ない」の

16 日本語の「貧乏」は「a. まずしいこと。財産や収入が少なくて生計の思うようにならないこと。貧困。貧窮。b. 収入・財産が少なくて、生活が苦しいこと」の意味を持つ。中国語の「貧乏」は「a. 因貧窮而物資匱乏（日本語のまずしいため、物質が乏しいにあたる）b. 不足、缺乏（日本語の乏しい、足りないにあたる）」との意味がある。

意味を持っている。ここから分かるように、RとHは、日本語の「貧乏」には「お金がない」という意味があると認識しており、加えて中国語での「貧乏」の意味、つまり、「乏しい」「少ない」の意味も含むと誤解していると考えられ、中国語の「貧乏」の意味から日本語の「貧乏」を推測しているといえよう。

4. 4 Nグループ「速達¹⁷⁾」

最後に、Nグループの語彙として、「速達」に関する用例を取り上げる。用例作成は以下のとおりである。

- (14) 速達郵便の料金は高いです。(R)
- (15) 急な手紙なので、速達で出します。(R)
- (16) これは重要な荷物だから、速達しなければならない。(H)
- (17) *日本語の速達は無理です。(H)

(14)～(16)は「速達」の意味と用法が把握されており、適切な用例であるのに対し、(17)は適切にならなかった。

(17)に関しては、内省報告によると、Hは「『速達』という単語を目にしたとたん、中国語語彙の『快速』と『達成』を連想し、そこから『快速』と『達成』の意味を使い、『速達』の意味を『早く上達する』、『早く達成する』と認識して使用した」と答えた。ここでは、Hは漢字の「表意性」の特徴を用いて、『速達』の意味と用法を敷衍していることが考えられる。

Nグループに属している漢字語彙は日本語だけに存在する漢字語彙であるため、中国語からの影響を受けずに日本語の新しい語彙知識として蓄積しつつあるといえる。しかし、例(17)から分かるように、中国語母語話者は文字を通して中国語語彙から日本語漢字語彙の意味を推測し、使用する可能性がある。

5 まとめ

第4節では、調査対象者2人の一部のデータを取り上げ、本稿の分析方法を通して、学習者による日本語漢字語彙の使用を観察した。こうした分析で、相当程度学習者の漢字語彙知識の利用の様子が観察できることが分かった。また、今回の観察では、SODN各グループの使用において、学習者は日本語漢字語彙の意味と用法を身に付けながら、中国語を利用していることが明らかになった。それは主に中国語の語彙知識が利用され

¹⁷⁾ 「a. 速やかにとどけること。速やかにとどくこと。b. 速達郵便の略。一般の郵便物より速く送達する制度。その郵便物」という意味である。

ている一方、中国語語彙の共起関係も関与している。

また、学習者が中国語の語彙知識を介さず、習得した日本語漢字語彙は、中国語の推測もしくは利用を通して習得した日本語漢字語彙の知識に比べ、より正確に使用できている様相が観察された。今回の分析では、SODN グループの使用において、中国語がもたらしたマイナスの面の影響が観察されたが、今後は中国語がもたらすプラスの面の影響、また、学習者が利用している他の語彙知識について検討していきたい。

参考文献

- 安龍洙 (1999) 「日本語学習者の漢語の意味の習得における母語の影響について—韓国
人学習者と中国人学習者を比較して—」『第二言語としての日本語の習得研究』3
号 pp.5-18 第2言語習得研究会
- ウヴェ・フリック (2002) 小田博志多 (訳) 『質的研究入門—<人間的科学>のための
方法論』春秋社
- 梅本堯夫 (1969) 『連想基準表 / 大学生 1000 人の自由連想による』東京大学出版
- 加藤稔人 (2005) 「中国語母語話者による日本語の漢語習得—他言語話者との習得過程
の違い—」『日本語教育』125 号 pp.96-105 日本語教育学会
- 黄宣範 (1993) 『語言・社會與族群意識台灣語言社會學的研究』文鶴出版有限公司
- 新村出 (2008) 『広辞苑 第六版』岩波書店
- 西尾実他 (1994) 『岩波国語辞典 第五版』岩波書店
- 文化庁 (1978) 『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- ロッド・エリス (1996) 金子朝子 (訳) 『第二言語習得序説—学習者言語の研究—』研
究社出版

参考ウェブサイト

- 重編國語辭典修訂本 <http://dict.revised.moe.edu.tw/> 教育部國語推行委員會編纂
(平成 20 年 9 月 22 日最終アクセス)